

# 中国語授業のつくり方

## －カリキュラム開発の視点から考察－

朴 雪 梅\*

### How to make a Chinese lesson

－Discussion from the Point of View of the Curriculum Development－

Xuemei Piao

---

【キーワード】 中国語, 授業づくり, カリキュラム開発, R-PDCA

#### 1. はじめに

「21 世紀の社会はグローバル社会である」と言われる。「人・物・情報・が、国境を超えて豊富に流通するようになる。そのような社会では、世界中に友達をもって、異文化の違いを乗り越えながら共同作業を行う力が必要になっている」と述べた（田中：2013.p.70）。そのうち、バイリンガルなど国際交流能力が重要になる。これからグローバル化の影響を進行しつつ、日本における外国語教育もさかんにしている。学生たちは大学に入ってから、第二外国語、特に中国語を学ぶことになっているチャンスがあり、異国文化等を味わえるよう学習意欲を高めることが求められる。

従来の中国語授業の研究では、例えば、張（2008）は大学の学生に対してアンケート調査を実行し、「学生の履修目的、授業の満足度」など実践例の報告を行った。干野（2012）は「中国語オプショナル」の授業運営の全体を述べ、具体的な教材例を紹介し、学生からのアンケート及び授業参観していただいた 2 名の教員からのコメントをもとに中国語の授業デザインについて考察した。いずれにしても、量的なアンケート調査を中心として実践報告を行われており、四年大学の学生を主に対象をとって研究が少なくない。2 年制の短期大学を研究の対象としてはない。とくに短期大学のカリキュラム開発についての研究が極めて少ないといえる。そこで、本稿では、まず、「カリキュラム開発」の概念、「学校を基盤としたカリキュラム開発（SBCE）」、R-PDCA の原理について取り上げる。次に筆者が担当している「中国語 A・B」（週 1 コマ×

---

所属および連絡先

\* 大阪千代田短期大学

15 回の初級) の平成 26 年度～平成 28 年度における実践を紹介しつつ、カリキュラム開発の視点から、中国語授業のつくり方を考察し、その有効性の実証を行いたい。

## 2. R-PDCA サイクルに基づくカリキュラム開発理論

### 2-1. 「カリキュラム開発」の概念

「カリキュラム開発」(curriculum development) とはどのようなことか。かつては、多くの場合、「カリキュラム編制」に言及し、それは「Curriculum Making」、「Curriculum Construction」、「Curriculum Building」などの用語からの翻訳であった。佐藤学(2002)が述べたように、「カリキュラム開発」(curriculum development) という用語が特定の様式を示す概念として形成されたのは、1920 年代～30 年代のアメリカにおける州・都市のカリキュラム改訂運動においてである。そして、この概念は、1930 年代～40 年代に普及し定着している。その普及を示すキャズウェルとキャンプベル(H. Caswell and D. Campbel)の『カリキュラム開発』(curriculum development. 1935)は、初めて「development」という概念を用いた。

### 2-2. 学校を基盤としたカリキュラム開発(SBCD)

スキルベック(Skilbeck)が1975年に提唱したSBCD(学校を基盤としたカリキュラム開発: School-Based Curriculum Development)というカリキュラム開発の原理である。「SBCDは、カリキュラム開発の主体を学校に置くとともに、子どものニーズや意見、地域の特色やリソースなどを十分に考慮して学校カリキュラムを編成する」ということを提唱している。すなわち、「カリキュラム開発のための最良の場は、学習者と教師が出会う所である」という考え方に基づき、学校を「人間的な社会制度」として再認識し、学校と教師のカリキュラム上の「自由」と「自律性」に関わる「哲学」であるとも言われている。

スキルベックは、SBCD の特徴を次のような五段階で規定している。

(田中: 2013.pp.268-269)

【SBCD の五段階モデル】(Skilbeck: 1984. p.231)

- ① 状況分析
- ② 目標の明確化
- ③ 教授-学習プログラムの設計
- ④ 教授-学習プログラムの解釈と実施
- ⑤ 教育評価

このように、スキルベックは、カリキュラムを研究者や学校から独立した実践家が作るものではなく、学校の教員が子どものニーズや地域の特色を十分に考慮して、自校の

子どものために主体的に編成する物であると規定したのである。(Skilbeck: 1984.p.274)

その後、文部省(当時)は、研究開発学校制度、特色ある学校づくり、そして総合的な学習の時間の創設等、SBCD の思想に基づく教育改革を推進してきた。

これからの学校カリキュラム開発においては、その手続きのプロセスとして、R-PDCA サイクルを採用することが大切である。学習指導要領解説の「総合的な学習の時間編」において、カリキュラム・マネジメントの必要性が述べられている。

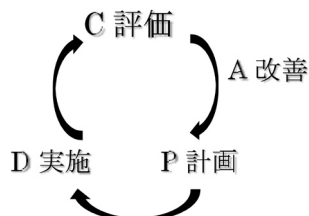


図1 カリキュラムマネジメント・モデル

出典：田村知子編著『実践・カリキュラムマネジメント』(行政、2011年) p.7の一部

そこで、筆者は、短期大学が開発したカリキュラムの品質を保証する狙いとして、学力向上の取り組みを支援する R-PDCA モデル(図1参照)に基づき、その教育成果を最大限に達成するためには、カリキュラムの開発から実施、そして改善までの一連のプロセスをある一定のマネジメント・プロセスに沿って行うことが必要であろう。

### 3. 実践研究の対象

本稿の実践対象は、大阪千代田短期大学における平成26年、27年、28年度の1回生である。学生たちはほとんどいままで中国語を履修したことがない、完全な初心者であること。大阪千代田短期大学では、教養科目としての中国語は必修科目ではなく、初年度だけ中国・英語等の外国語から2単位を取れば卒業することができるになっている。1回生の中国語は選択制(通年2単位)であり、一学期の授業数は試験を除いて全部で30回である。筆者が担当しているクラスは平成26年度と27年度の火曜日の1限目と平成28年度の日曜日の4限目である。また、大阪短期大学の1回生は統一の教材を用いている。現在使用している教材は『<<最新版>>1年生のコミュニケーション中国語』(塚本慶一 監修、劉穎 著、白水社、2013年)である。

表1 中国語授業を受ける学生リスト

(単位：人)

学 科	平成26年度		平成27年度		平成28年度	
	前期	後期	前期	後期	前期	後期
幼児教育科 (1回生)	30	30	8	7	14	10
総合コミュニケーション学科 (健康医療実務－1回生)	4	4	－	－	－	－
合 計	34	34	8	7	14	10

出典：総合コミュニケーション学科の中で、介護福祉コースは中国語授業がない  
 幼児教育科は平成27年度に中退生が1人であり、平成28年度に中退生が4人であった。  
 平成28年度より、健康医療実務コースを廃止した。

## 4. 「中国語A」の授業づくり

### 4-1. 授業の全体的な計画

本節では平成 28 年度本科目のシラバスの記載を抜粋し、授業計画等について紹介する。まず、「授業の目的」と「授業の内容」については、以下の通りである。

#### 1) 授業の目的

初心者が中国語に興味を持ち、正しい発音に伴う基礎中国語からより効率的に学習できるようになることである。中国語の入門の基礎を確実に身につける。

#### 2) 授業の概要

中国語の基礎的な発音を身につけ、初級レベルで、日常生活によく使う表現を繰り返し学習する。語彙を少しずつ増やして、基礎と応用がバランスよく組み込まれた練習問題を用意する。また、DVD で学ぶ中国文化を適切に活用する。

#### 3) 授業終了時の達成課題（到達目標）

中国語の発音をしっかり身につける。

日常生活でよく使用される単語・会話を覚えて、大いに活用できるようにする。

中国の文化や中国人の風俗習慣などを理解する。

#### 4) 前期の授業計画

- ①. 中国と中国語について紹介し、また DVD で中国の文化について簡単に説明する
- ②. 身の回りの簡単なあいさつから発音のしくみ
- ③. 「自己紹介」（基本の挨拶、人称代名詞、判断文）
- ④. 「これは何ですか」（指示代名詞(1)、判断文の否定・疑問形、「の」の言い方）
- ⑤. 2 課～4 課のまとめ、学習進度チェックテスト 1
- ⑥. 「これはいかがですか」（指示代名詞(2)、形容詞述語文、疑問詞）
- ⑦. 「買い物」値段の聞き方、数の数え方（数詞）と物を数える時の単位（量詞）、助詞
- ⑧. 6 課～7 課のまとめ、学習進度チェックテスト 2
- ⑨. 「どこにありますか？」（場面指示代名詞、動詞の「在」、助動詞「意思・願望」）
- ⑩. 「何かありますか」（動詞「有」、場所代名詞、「ある、いる」の言い方）
- ⑪. 9 課～10 課まとめ、学習進度チェックテスト 3
- ⑫. 発音のまとめ、ピンインの発音練習
- ⑬. 単語、会話のまとめ
- ⑭. グループ分け、日常生活によく使う表現を演習する
- ⑮. 前期まとめ

#### 5) 後期の授業計画

- ⑯. 「月日の表現、曜日の表現」(指示代名詞、名詞述語文)
- ⑰. 「時刻の表現、年齢の表現」(時刻の言い方、時間詞、時間の長さを表す語)
- ⑱. 16 課～17 課のまとめ、学習進度チェックテスト 4
- ⑲. 「私は～します、したことがあります」(動詞の文の表現、「疑問・推量」、「提案・命令」を示す語気助詞「吧」)
- ⑳. 「ホテルのフロントで」(完了を表す「了」の使い方、「もうすぐ～だ」という表現、選択疑問文「还是」)
- ㉑. 19 課～20 課のまとめ、学習進度チェックテスト 5
- ㉒. 「タクシーに乗る」(前置詞「～から～まで」、2つの目的語をもつ動詞「給」)
- ㉓. 「試着と支払い」(助動詞「可以・能・会」、前置詞「在」、動詞の重ね用法)
- ㉔. 22 課～23 課のまとめ、学習進度チェックテスト 6
- ㉕. 「苦情を訴える」(前置詞「給」、「是」の省略、「去・来」+動詞、年号・電話番号)
- ㉖. 「紛失届を出す」(「是～的」)
- ㉗. 25 課～26 課のまとめ、学習進度チェックテスト 7
- ㉘. 単語、会話のまとめ
- ㉙. グループ分け、日常生活によく使う表現を演習する
- ㉚. 後期まとめ

以上のように、「中国語 A」授業づくりにあたっては、図 2 のように、調査 (Research)→計画 (Plan)→実施 (Do)→評価 (Check)→改善 (Action) という「R-PDCA モデル」の流れに沿って多様な活動を積み上げていく。具体的内容を次節に詳述している。

#### 4-2. R-PDCA に基づく授業づくり

##### ◆第一：調査 (Research)

まず、調査段階では、①. 先行研究の検討、②. 授業目標の考慮という 2 つの活動を行う。

①. 先行研究の検討とは、これまで短期大学が中国語授業に関する実践報告書などを読んで、どのように実施していたのか、どのような課題が残されているかを調べて、学習意欲を向上させるため、どのような授業が作ればよいかについて大きな見通しをもつことである。

一方、現在の学生は、以前とは異なり、中国語に対するそれなりに関心・興味があり、自発的に学習に取り組むなど、積極性が現れている。なぜなら、観光立国を目指している日本は、円安の影響と外国人に対するビザなどの緩和政策により、海外からの観光客がものすごい勢いで増えつつあるからである。そのうち、「爆買い」ブームを起こし、日本全国を席巻している中国人観光客がいる。そこで、中国という国と中国人の性質を理解することから始め、初心者が中国語に興味を持つようになってきた。

②. 授業目標では、計画段階での目標を設定するとともに、学生たちにどのような能力を身につけるべきかを考慮する。すわなち、中国語を読み、書きだけではなく、日常生活の中でよく使用する単語や会話を覚えて、大いに活用できるようにするコミュニケーション能力、異文化に対する基礎的な理解を身につけることを目指す。

## ◆第二：計画（Plan）

次に計画段階では、①. 目標設定、②. 計画立案という2つの活動を行う。

①. 目標設定の段階では、調査の結果に基づき、到達目標を達成するため設定することである。授業目標は最終目標と短期目標という2つに分けられている。最終目標を達成するため、一つ一つの短期目標を通じることが必要である。前掲に基づいて、最終目標とは「正しい発音に伴う基礎中国語からより効率的に学習できるようになること」であり、各短期目標とは各授業のタイトルである。いずれも、結局のところ、中国語の正しい発音の習得を目指すことを意味する。なぜなら、中国語初心者にとって、音声のみで基本的なあいさつや自己紹介等を相手に伝えることは容易ではなく、それを目標とすることは音声表記法であるピンインの仕組み（子音と母音、声調）の習得、それに直結するものであると考えられる。

②. 計画立案では、各短期目標によって、前掲のように前期と後期の授業計画を立てる。これらの計画に基づいて、中国語科学習指導案を作成する（表2を参照する）。

## ◆第三：実施（Do）

第三の実施段階では、作成した中国語学習指導案を実施する。ここには、授業実践と中国料理や茶会が含まれる。さらに、学生たちの学力実態を把握するために2～3回授業を終わり次第に、単語と会話表現を別々にまとめて復習を行い（表3を参照する）、学習進度チェックテストを定期に行う。

一方、授業実践を通じて学生たちの学びの達成感を味わうことができる授業づくりのためには、さらに以下の3つの工夫点を意識している。

- 工夫点1 学生の主体意識や希望を重視し、魅力的な学習課題を設定する。例：食文化、茶文化、ハロウィーン（中国語：万圣节）等
- 工夫点2 授業中、教科書だけに頼らず、ビデオ、歌などを活用する（例：ビデオー買い物、交通機関の利用など、歌ー隠れ翼など）
- 工夫点3 グループに分け（3～4人に1つのグループとする）、日常会話を練習して発表する（例：自己紹介、旅行会話など）

表 2 中国語科学習指導案

段階 (時間)	学習事項	生徒への働きかけ (発問、助言、指示)	学習活動	教師の支援 (準備を含む)
10～ 15 分	前回の授業の ポイントについ て復習をしま す。	日本語と比べて、共 通点と相違点は何で すか？	学生の答えを聞く	単語のチェックテスト 用紙を用意する。 (10 分くらいに回収す る)
10 ～ 15 分	第 2 段階 「発音の仕組み について」  一．声調をマス ター (中国語をマス ターするときは、 正確な発音とと もに、この 4 つ の調子をマス ターしなくてはな りません。しか し、「自分は音痴 だから中国語が できないのでは ないか」とビク ビクする必要は ありません。)	中国語には、「声調」 という声の調子があ ります。ここで学ぶ 中国語の共通語に は、声調はいくつが ありますか？	学生の答えを聞く  第 1 声、第 2 声、第 3 声、第 4 声の 4 つがあり、こ れらはまとめて「四声」と呼ばれています。	
			第 1 声 a 高い音をず一つと出します。(そのまま同 じ高さで平らに続けます) 子どもが「イーッだ」と 言うときの「イー」の調子です。例、【妈妈】(ma ma)	
			第 2 声 a 自然に発音し、後ろの部分を一気に上げ ます。驚いたときに「エエッー！」と聞き返すよう な、上り調子の発音です。例、【伯伯，婆婆】 (bobo, popo) 【您】(nin ニン)	
			第 3 声 a 低めのところからさらに低くたゆませ て、緩やかに上げます。感心したときに「ヘエー」 とうなる感じです。例、【你好】(ni hao ニイ ハオ)	
			第 4 声 a 高い音から、一気に引き下げる発音です。 ちょうどカラスが「カァ」と鳴くときの調子に似て います。例、【再见】(zai jian ツアイ チエン)  ※轻声: 上に並べた 4 つの声調以外に、「谢谢(xiexie シエシエ/ありがとう)などのように、後ろの字がも ともとの声調を失って軽く発音されるものもあり、 これを「轻声」と言います。	

出典：前期の②中国語科学習指導案の一部を抜粋した。筆者作成。



表 3 (後期⑱～㉔) の授業まとめ

## ①. 単語

一、人称指示代名詞（単数）		二、人称指示代名詞（複数）	
中国語	日本語訳	中国語	日本語訳
我 wǒ	わたし	我 们 wǒ mén	私たち
你 nǐ	あなた	你 们 nǐ mén	あなたたち
他／她 tā／ tā	彼／彼女	他 们／ 她 们 tā mén／ tā mén	彼たち／彼女たち
三、名 詞			
中国語	日本語訳	中国語	日本語訳
汉 语 hàn yǔ	中国語	中 国 zhōng guó	中国
寒 假 hán jià	冬休み	音 乐 yīn yuè	音楽
暑 假 shǔ jià	夏休み	一 起 yī qǐ	一緒
房 间 fáng jiān	部屋	明 天 míng tiān	明日
早 餐 zǎo cān	朝食	学 校 xué xiào	学校
中 餐 zhōng cān	中国料理	西 餐 xī cān	西洋料理
四、動 詞			
中国語	日本語訳	中国語	日本語訳
学 习 xué xí	勉強する	听 tīng	聴く
去 qù	行く	预订 yù dìng	予約する
吃 chī	食べる	喝 hē	飲む

## ②. 会話の表現について

	現在式「～します」	過去式①「～したことがある」	過去式②「～した」完了を表す
肯定文	我 去 中国	我 去 过 中国	我 去 中国 了
「語順」	「主語+動詞+目的語」	「主語+動詞+过+目的語」	「主語+動詞+目的語+了」
日本語訳	私は中国へ行く	私は中国へ行ったことがある	私は中国へ行った
否定文	我 不 去 中国	我 没有 去 过 中国	我 没有 去 中国
「語順」	「主語+不+動詞+目的語」	「主語+没有+動詞+过+目的語」	「主語+没有+動詞+目的語」 「了」はつけない
日本語訳	私は中国へ行かない	私は中国へ行ったことがない	私は中国へ行かなかった
疑問文	你 去 中国 吗？	你 去 过 中国 吗？	你 去 中国 了吗？
「語順」	「主語+動詞+目的語+吗」	「主語+動詞+过+目的語+吗」	「主語+動詞+目的語+了+吗」
日本語訳	あなたは中国へ行くの？	あなたは中国へ行ったことがあるの？	あなたは中国へ行ったのか？

出典：筆者作成。



#### ◆第四：評価（Check）

第四では、15回の授業を終了した後に、評価方法が出席（30%）、授業態度とチェックテスト（30%）、期末筆記試験（40%）という3つに分けられる。15回の授業までの参加状況を評価するとともに、定期的な学習進捗チェックテスト、期末試験等得られたデータをもとに学力の評価を行う。表4より、平成26年度～28年度の前期の学力について、受験生全員は合格であったが、平成26年度の前期と後期の割合差が小さかった。平成27年度の前期の割合差が大きくなったが、後期の割合差がほとんどなくなった。なぜなら、後期においては毎回授業に出席している人数が不安定で、減点になってしまいが、後期の授業について改善することが必要となっている。

表4 学力の評価－人数（割合）

単位：人（%）

年度	評価点欄	幼児教育科（前期）	幼児教育科（後期）	合計
平成26年度	A:100－80	10（33%）	11（38%）	21（36%）
	B:79－70	13（44%）	10（34%）	23（39%）
	C:69－60	7（23%）	8（28%）	15（25%）
平成27年度	A:100－80	5（63%）	2（33%）	7（50%）
	B:79－70	1（12%）	2（33%）	3（21%）
	C:69－60	2（25%）	2（33%）	4（29%）
平成28年度	A:100－80	8（73%）		
	B:79－70	3（27%）		
	C:69－60	0		

出典：各年度の成績記入表に基づいて筆者を作成した。  
平成26年度の後期の受験生：29人；平成27年度の後期の受験生：6人

#### ◆第五：改善（Action）

最後は、改善の段階である。ここでは、第四段階の評価の結果を受けて、中国語授業の在り方について修正し、改善する。とりわけ、授業の集中力や気分転換のため、授業の中に新しい内容に入れて、多様化的な方向を改善している。平成27年度～28年度の改善点は以下の通りである。

- 平成27年度の前期：茶文化－中国のお茶について（緑茶、紅茶、烏龍茶、菊花茶等）を紹介し、味わいながら飲み方も説明すること
- 平成27年度の前期：食文化－水餃子の作り方について教えること、学生たちは自分で餃子の餡から一步一步で、丁寧に餃子を作ること
- 平成28年度の後期：DVDで中国の文化について説明すること、中国における大学の学生生活や部活動、有名な観光地域（北京、上海、四川、雲南省等）、国宝パンダ等がDV

Dを通じて観られること

## 5. おわりに

本稿では、カリキュラム開発の視点から、R-PDCAによる中国語授業づくりの過程を取り上げて、この3年間の実践を行って、効率的な学習モデルを示したと言える。図2のようにまとめることができるだろう。

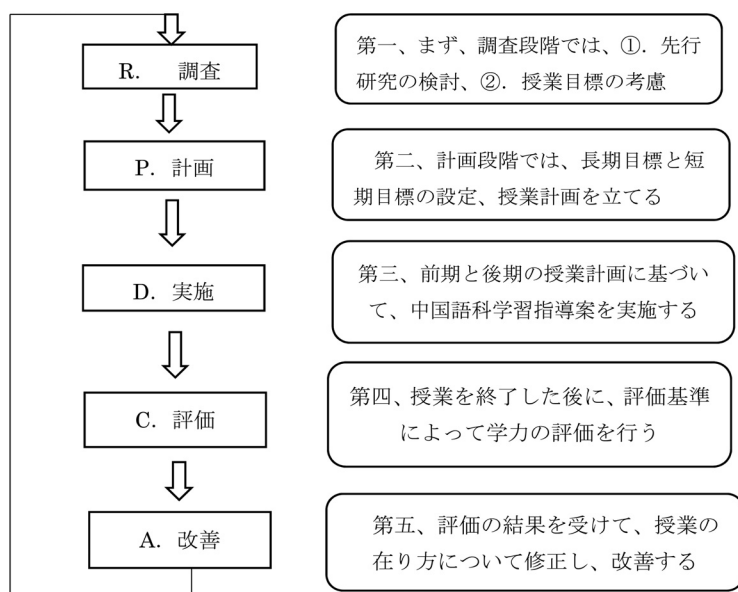


図2 R-PDCAによる授業づくり

これまでの実践教育は、週1コマ全15回の中国語の初級レベルにおける授業の中で、学生の要請に対して即時的にかつ柔軟に特色あるカリキュラムを作ることにより、学生たちの成績を上げてきたが、中国語授業に対する学生の学習意欲を導くことはまだまだ開発の途中である。特に後期授業の内容について工夫する必要があるだろう。例えば、後期の授業計画の中で、一つは、チェックテストは4回がある。前期にも3回があり、学生の不満を招いてしまう。また、平成27年度まで中国語の漢字にピンインを付けるという問題様式を入れたが、テストの難易度を調整するため、今年度前期より選択肢という様式にした。しかし、後期のテストではピンインを殆ど書けない学生が出てきてしまった。問題様式に加え、テストの実施数を減らすべきではなく、実施形式や方法等を工夫しなければならない。もう一つは、授業の多様化を実現するため、15～20分くらいにDVDやビデオを通じて取り組んできたが、途中で厭きてしまった学生が出てきた。そのため、授業の状況により、時間を調整しなければならない。

今後、筆者はこれまでのカリキュラム開発の研究に、さらにシラバスの研究に加え、より効果的な授業を追求していく予定である。

**【引用文献】**

張軼欧（2008）「初級段階の中国語学習者の意欲向上を目的とする授業法の開発とその実践報告－教養語学を中心に－」（関西大学外国語教育機構『外国語教育フォーラム』第7号 pp.57-71）

干野真一（2012）「中国語入門科目の授業デザインに関する考察－「中国語オプショナル」における実践から－」（新潟大学言語文化研究 Vol.17 pp.57-71）

佐藤学著（2002）『カリキュラムの批評』（世織書房）

田中博之（2013）『カリキュラム編成論－子どもの総合学力を育てる学校づくり－』（放送大学教育振興会）